

# 筵三枚御書

弘安五年三月 六一歳

むしろ <sup>なまわかめ</sup> 生和布一籠 <sup>こた</sup> 給び了んぬ。

抑三月一日より四日にいたるまでの御あそびに、心なぐさみてやせやまいもなをり、  
虎とるばかりをばへ候上、此の御わかめ給びて師子にのりぬべくをばへ候。

さては財 <sup>たから</sup> はところにより、人によって、かわりて候。此の身延山には石は多けれども餅なし。こけは多けれどもうちしく物候はず。木の皮をはいでしき物とす。むしろいかでか財とならざるべき。

億耳居士 <sup>おくにこじ</sup> と申せし長者は足のうらにけの <sup>毛</sup> を <sup>生</sup> いて候ひし者なり。ありきのところ、いへの内は申すにをよばず、わたを四寸しきてふみし人なり。これはいかなる事ぞと申せば、先世にたうとき僧にくまのかわを <sup>敷</sup> しかせしゆへとみへて候。

いわうや日本国は月氏より十万 <sup>余</sup> <sup>里</sup> よりをへだてて候辺国なる上、へびすの島、因果のことわりも弁へまじき上、末法になり候ひぬ。仏法をば信ずるやうにてそしる国なり。しかるに法華經の御ゆへに名をたゝせ給ふ上、御むしろ <sup>筵</sup> を法華經にまいらせ給ひ候ひぬれば、